喫茶店に半ば強引に誘われた。背の高いボックスシートに座ると、拓雄と並んで座った。すぐに千里は優腰を抱かれ、スカートの裾の中に若者のもう片方の手を入れられた。太股の付け根を愛撫され、パンティの上から千里の敏感な女の部分を触られた。

「よして」

千里は腰をよじって若者の手を押さえた。若いウエイトレスが注文をとりに近寄ってくる。

拓雄は含み笑いを洩らして、スカートの手を引っ込めた。千里は小さく息を吐き、ウエイトレスを見た。視線が合うと、千里は急に恥ずかしい思いが湧き起こった。若い男と身体を密着させて座っている自分はどのように見られているかと思うと、羞恥が胸に満ちてくるのだ。

注文をとったウエイトレスが一礼して立ち去るとつつましく膝においていた白い手を拓雄が握ってきた。指をからめてくる。その手は汗ばんでいた。発

汗しているのは千里の手だった。

　コーヒーと紅茶が運ばれてきた。拓雄は若いウエイトレスに見せつけるように、千里の尻をスカートの上から露骨に撫でた。若い女性は驚いたように目を見張ると、足早に席を去って行った。

　千里の尻の丸みが執拗に撫でられる。千里は腰をよじらせながら

「ああー」

と小さくあえぎを洩らした。

「たまらねえな」

拓雄は興奮した様子で、強引に千里のワンピースをたくし上げて光沢のあるベージュのパンストと刺繍入りのパンティを下ろしにかかった。

「ここではいやっ」

千里は小声でそう言ったが、強く抵抗することはできない。喫茶店のボックス席だが、周りの客の目が気になった。

　とうとう、パンティが足首から抜かれ、千里の下半身は無防備となった。尻肌をじかに撫でられる。指は女の柔らかな部分にも這い、媚肉を指腹でくつろげられた。

「ああっー」

思わず声がもれ、すぎに唇を噛んで耐える。

　丸く張りだした尻肉にするどい針が突き刺さる。この若者の好む責めで、千里は寝室で針責めに泣かされることがたびたびであった。しかし、外で針責めをされるのは初めてだった。二本、三本と針が植えられていく。千里は唇を噛んで痛みを堪えた。

「うぐっ」

刺される針は深く尻肉をえぐってくる。

「ゆるして」

痛みに耐える哀れな声を出して懇願する千里を見て拓雄はさらに加虐嗜好を刺激される。次々と針を刺

し、美しい顔が苦痛にゆがむのを眺めている。

　喫茶店を出ると、千里はくびれた腰を抱かれて歩いた。もう針は抜かれているが、アヌスの知覚に針を刺されたときの痛覚が残っている。

「喫茶店でお尻を責められて、すごく恥ずかしかったわ。あなたは若いくせに女の躯を残酷にもてあそぶのが好きなのね」

そう言って拓雄の腕を軽くつねった。せめてもの抵抗だ。

　千里は近くにある果物店で大粒のイチゴパックを買い求めると、タクシーを拾った。タクシーの運転手は、千里の美しさに見とれている。色白の目鼻立ちのはっきりとした美人だ。スタイルもいい。すらりと伸びた肢体を上品なワンピースに包んでいるが、胸の隆起は男性の視線を誘う。臀部の丸みも肉感的だ。

タクシーが走り出すと、拓雄は千里の肩に手を回し、引き寄せた。白い首筋に口をつけて吸う。やがて千里の口を吸ってきた。

タクシーの運転手はバックミラーで後部座席の美熟女と若者の行為をちらちらと盗み見る。大胆なキスをし、若者の手は、美しい女の胸をこれみよがしに愛撫していた。見せつけるように大胆で、胸を揉まれる美しい女は、羞恥心にさいなまれて目を閉じ、ときおりせつなげにあえいでいる。
何とも妖艶な色香を滲ませるいい女だろう。初老の運転手の股間は久しぶりに固くなっていた。

家では、もう門灯がともっていた。家政婦の勝代が玄関に出迎えていて
「お帰りなさい」と
いいながら、若者に腰を抱かれている未亡人の羞恥の表情を見た。腰を抱かれていた千里は、ワンピー

スの上から臀部を撫でられている。見せつけるように美しい未亡人のむっちりとした臀丘を撫で、勝代に含み笑いの視線を送った。

　勝代は大柄な体躯の住み込みで働いている３０代の未婚の女だ。

「未亡人の尻の形がいいな」

拓雄に尻を愛撫されつつ、

「淫らなことは言わないで」

家政婦の手前、女主人のプライドを守るために強い口調でたしなめる千里はいきなり口を吸われた。